岡豊風土

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第61号 2007年9月30日

日本考古学の発祥の地

東京都大森貝塚の発見と土佐出身の若き学徒

岡本　桂典

明治一〇年（一八七七）六月一七日（日）深夜、横浜港にサンフランシスコを五月二九日に発った蒸気船シティー・オブ・トーキョー（City of Tokio）が入港しました。その船から一人のアメリカ人動物学者が降り立ちました。彼の名は、エドワード・シルベスター・モース（一八三八～一九二五）、今でいう生物学者で、貝の研究を専門とし、その研究のために日本にやってきたのです。

当時の横浜港には、まだ大きな船は接岸ができなかったようです。船は、沖合に停泊し、そこから小舟で荷物や人を岸まで運んでいました。モースの残した日記、『日本その日その日』（Japan Day by Day）には、日本へ着いた当日の様子が以下のように記されています。

「ホテルに所属する日本風の小舟が我々の乗船に横づけにされ、これに乗客中の数名が乗り移った。この舟というのは、細長い、不細工な代物で、犢鼻褌（ふんどし）だけを身につけた三人の日本人――小さな、背の低い人たちだが、恐ろしく強く、重いトランクその他の荷物を赤裸の背中にのせて、やすやすと小舟に下した――が、その側面から櫓をあやつるのであった。我々を海岸まではこぶ二マイル（一マイル＝約一・六〇九三km）を彼等は物凄い程の元気で漕いだ。そして彼等は実に不思議な呻り声を立てた。お互に調子をそろえて　ヘイ　ヘイチャ　ヘイ　ヘイ　チャ（モースにはこのように聞こえた）というような音をさせ、時に船唄（若しこれが船唄であるのならば）を変化させる。」（『日本その日その日1』E・S・モース　石川欣一訳より）とモースは学者らしく鋭い観察をしています。小舟はやっと岸に着き、モースは叫びたいほどうれしかったと日記に書いています。その夜は、人力車でグランドホテルに向かい宿泊しましたが、興奮のあまりほとんど眠れなかったようです。一八日に三九歳の誕生日を迎えたモースは町を見学、一九日に東京へ向かいました。外国人が居留地より自由に移動できるのは、一〇里以内とされていましたので、文部学監のダヴィット・マレーに会い便宜を図ってもらうためでした。モースは、横浜停車場（現在の桜木駅）まで人力車で向かい五年前に開通した汽車に乗り新橋に向かいました。前年に設置された大森停車場を汽車が発車してすぐ、白い貝殻が堆積した場所を発見しました。モースはこの事については日記には書いていません。この貝塚をモースが訪れたのは三ヶ月後のことです。

モースは、現在の品川区大井六丁目から大田区山王に広がると推定される大森貝塚を三ヶ月後に発掘調査したのです。この記念すべき日本で初めての考古学的調査に参加し、報告書の作成に力を注いだ東京大学の専門生徒の一人に現高知県大豊町出身の若い学徒がいました。二二歳という若さでこの世を去った松浦佐用彦その人でした。この写真は当時の彼の厳しい東京での生活の一端を写し出しています。

F.TSUKAMOTO.
KUDAN段九京東TOKIO
製本塚

松浦佐用彦の肖像写真
（東京大学総合研究博物館動物部門所蔵）

企画展

土佐発掘物語 ―土佐の発掘史―

土佐考古学史Ⅰ ―明治時代を中心として―

一

「考古学は過去人類の物質的遺物に依り人類の過去を研究するの事なり」（濱田耕作『通論考古学』一九二二年）という定義のもとに日本の考古学は、発展してきました。

日本の考古学は、文献資料が存在する以前の時代に関心が高かったのですが、古代そして中世・近世を対象とする分野の考古学研究が活発になってきているのは、周知のところです。考古学が対象とする時間的範囲は、先の定義よりすると、人類の誕生から昨日までといえます。最近、近代～現代の遺跡にも関心が持たれるようになってきたのは、当然のこととともいえるのです。なお、この考古学が対象とする資料には、地下の埋没資料と伝世品などの地上資料があります。考古学史を語る時、埋没資料のみに目を向けるのではなく、地上資料の考古学史にも関心をはらう必要があります。

今回の企画展は、土佐発掘史としていますが、発掘品以外の考古資料についても若干みてみたいと思います。

二

私たちが、過去の埋没資料に目を向けたのは、最近のことではありません。それでは、いつ頃から関心があったのでしょうか。考古学史の年表（斎藤忠『日本考古学史年表』など）を繙いて少し垣間みてみます。

弥生時代の青銅器の中で良く知られているものに銅鐸という祭器があります。この銅鐸の発見に関する記録は、意外と古く古代に遡ります。銅鐸は、形も大きく奇異な形をしているため、記録に残されやすかったようです。天智天皇七年（六六八）、近江国滋賀郡（滋賀県）の崇福寺建設にあたり土地を平坦にする工事をした時に、高さ五尺五寸の奇異なる宝鐸が掘り出されたとされています。宝鐸、つまり銅鐸が発見されたというのです。

石器についての記録もあります。発見された石器が神秘的なものとして取り扱われていた例もあります。石器の中でも特に石鏃は特異な形状をしている上に、石の色も種々あることから早くから人々の目を引いていました。矢の根石と理解されていたようですが、自分たちの先祖が使ったものという考えには及ばなかったようです。すでに承和六年（八三九）に出羽国田川郡西浜（山形県）で長雨と雷雨が続き、その後晴天になった時に鏃に似たものが海浜に多くみられ、皆西に向いており、国司は朝廷に献じ、その後朝廷では異変があることをおそれて神仏に祈ったとあります。また、元慶八年（八八四）には、出羽国（秋田県）でも雷雨の時に石鏃が天から降ったと記録されています。激しい雨で、石鏃などが土の中から現れたものですが、当時の人々は不思議な現象と思ったのです。

古墳などは、盗掘にあった記録が残っていますが、盗掘をすると祟りがあるという現象も生まれました。肥後国（熊本県）の大野窟古墳では、明応六年（一四九七）に僧が一夏参籠し阿弥陀如来を安置し銘文を残しています。古墳の石室が修行窟として用いられたという興味深い例です。

次に江戸時代の土佐国の記録をみてみましょう。

明暦三年（一六五七）の一二月、現四万十町（旧窪川町）で銅矛五口が発見されました。この発見記録は、以下のように記されています。「神ノ崎村新田開発し井溝を子々崎村金カ淵の上へ堀廻し有けるを山添溝掘替える時に山崎に五本一所に埋みぬれば」（『南路志』闔國之部）とあり、現在の四万十町（窪川町）根々崎の山丘上山際から発見されたものと推定されています。

四万十町で発見の銅矛５口　高岡神社所蔵

銅鐸の発見についても『南路志』闔國之部に記録があります。香美市香北町大川美良布神社には、現在二口の銅鐸が伝世していますが、この銅鐸について以下の記録があります。「韮生郷大川上美良布社に降鐘と云物二ツ有。古へ五百蔵村へ天より降たると云故に…」とあります。この銅鐸は、五百蔵

から出土したものと思われます。また、同書に「神宝降鐘二雌鐘雄鐘といふ雨乞いの時大川のせんが石へ並置て雨を祈る也」とあり、雨乞いに用いられたことは、銅鐸が水の信仰と関わると思われていたことを示しています。このように弥生時代の青銅器の発見記録を繙くと青銅器は、偶然に出土したものが多いことが理解されます。

さて、テレビ番組の水戸黄門は、一九六九年に放送開始された長編番組ですが、実はこの水戸黄門こと、水戸光圀は日本の考古学史の上で重要な仕事をしています。栃木県大田原市湯津上に上侍塚古墳・下侍塚古墳の二基の前方後方墳があります。元禄五年（一六九二）に徳川光圀の命により日本で最初の学術的な発掘調査が上・下両侍塚古墳で行われました。この時に出土した遺物は、画工により図化され、木の箱に納め古墳の中に埋め戻されています。墳丘上には、盛土の崩落を防ぐため松が植えられ、今日の文化財の保存対策をしています。その姿勢は文化財保護の手本ともいえます。

三

日本の近代考古学は、明治時代に始まります。ここからは土佐の明治期の考古学史を少しみてみましょう。

エドワード・シルベスター・モース（晩年）
（東京大学総合研究博物館所蔵）

生物学者エドワード・シルベスター・モースの弟子の一人に土佐出身の若き学徒松浦佐用彦がいました。この若き学徒は、日本の近代考古学の出発点ともなった大森貝塚の発掘調査に参加しています。

モースは、大森停車場を出てから線路脇の切り通しに白い貝殻が露出しているところを発見しました。これが大森貝塚です。モース達は、明治一〇年九月一六日に籠をもち最初の調査をしています。この発掘調査に参加したのは、松村任三・佐々木忠次郎・松浦佐用彦の三人です。松浦佐用彦は、長岡郡豊永郷黒石村（現在の長岡郡大豊町黒石）の郷士の出です。生年については、異説もあり明確ではありませんが、安政三年（一八五六）と推定されています。明治六年（一八七三）に新設された東京外語学校に入学、明治一〇年四月より東京大学法理文三学部の生物学専攻の特別生となり、モースに師事しています。モースと松浦佐用彦は、発掘以前の明治一〇年八月二〇日ころに、江の島の臨海実験所で出会っています。モースは、松浦佐用彦のことを佐々木忠次郎とともに生物学科第一回生となった秀才と記しています。モースによって執筆された『大森介墟古物篇』の「はしがき」の末尾に「資料の大多数は、佐々木君と松浦君とによって蒐集され、最大の努力をもって可能な限りの整理研究がなされた」とあります。

大森貝塚発掘（『大森介墟古物篇』より　品川区立品川歴史館提供）

明治一一年七月五日、モースの北海道への調査に同行するはずであった弟子松浦佐用彦が急逝しました。モースは松浦佐用彦の死に接し次のように書き残しています。

「私がことのほか愛していた松浦が、昨夜病院で、あの脚気という神秘的な病気が原因で死んだ。彼は大部長いこと病気していたので、私は度々病院へ見舞に行った。すると彼は、学校の仕事がどんな風に進行しているかを質ね、最後の瞬間まで興味を持ち続けていた。」（『日本その日その日2』E・S・モース　石川欣一訳より）

翌日、モースは谷中で埋葬に立ち会いました。悲運の死を遂げた松浦佐用彦の墓は、東京都台東区七丁目谷中霊園乙六三号三側にあります。墓標正面には「高知縣松浦佐用彦墓」と銘が刻され、裏面にはモースの英文銘を上段に刻し、その下に縦一一行にわたり日下部東作の漢文銘が刻されています。そして「東京大學有志輩建立／明治十二年七月八日」とあります。松浦佐用彦は、脚気という病になり、新しい

松浦佐用彦墓

時代の新しい学問に殉じたと言えます。

四

明治～昭和の初期にかけて土佐の郷土史家・考古学者として活躍した人物に寺石正路がいます。寺石は、明治元年（一八六八）に現在の高知市九反田に生まれました。明治一七年に東京に遊学、神田の共立学校（後の開成学校）に入学、そして翌年の明治一八年七月には東京大学予備門（後の第一高等学校）に入学しました。しかし、寺石はその後脚気を発病、さらに一〇月ころから胃腸を患い、翌月には体調を崩すこととなり、明治一九年一月に静養のため帰郷することとなりました。その後、病状は回復せず、同年七月に遂に退学届を出し東京での勉学を涙を飲んで諦めました。

寺石正路

その後、寺石は明治二〇年に、佐川（現高岡郡佐川町）英學會の夜間講師の依頼を受けました。この時、佐川で植物学者牧野富太郎と親交、『東京人類學雑誌』を贈られました。寺石は、この雑誌を通して坪井正五郎らを知り人類学に大変興味を示し、入会することとなりました。早速、明治二一年二月には、『東京人類學會雑誌』第三巻第二四号に「土佐国長岡諸村塚穴」と題して投稿、報告が掲載されました。

明治二三年八月の同誌に、「九州ノ貝塚（圖入）」（『東京人類學會雑誌』第五巻第五三号）と題し投稿、前年に調査した「肥後曽畑村貝塚」「筑前木月村貝塚」「筑前楠橋貝塚」の発掘の成果を述べています。

寺石は、明治二二年再び学問への挑戦を始めたのです。同年三月には、人類学研究推進のため九州へ遺跡探訪に出かけます。帰郷後の同年一二月に上京、東京理科大学地質学教室にて行われた第五六回の東京人類學會で九州での成果を報告し、初代人類學会会長神田孝平に指導を受けています。寺石にとっては再度の上京で、もう一度のチャンスと奮起しましが、翌年図らずも再度脚気にみまわれ、二度目の東京遊学の夢を断ち切られることとなってしまいました。

明治二三年、寺石は高知尋常中学校（現県立高知追手前高等学校の前身）の助教諭となり、図画の教師、幡多郡宿毛村（現宿毛市）出身の上村昌訓と出会いました。寺石が、四国にも貝殻の散布する場所があることを聞かされたのは、上村からでした。

寺石は幡多に旅行、さらに現在の愛媛県御荘まで調査の足を伸ばし、宿毛貝塚（高知県宿毛市）と平城貝塚（愛媛県南宇和郡愛南町）を発見しています。その報告は、明治二四年一〇月の「四國島貝塚ノ発見（圖入）」『東京人類學會雑誌』第七巻第六七号に掲載されています。寺石は、四国で初めて貝塚を発見し、全国的にも名声を上げました。

寺石正路の「土州宿毛貝塚」スケッチ

五

松浦佐用彦は、若くしてこの世を去りました。しかし、モースと出会い貴重な人生を生きました。かつて、縁あって東京都谷中の松浦佐用彦の墓にお参りしたことがありました。お墓にはうっすらと雪が積もっていました。お墓の花立てには、だれかが供えた新しい花が立てられていました。

若くして志半ばで倒れた松浦佐用彦、病に倒れても研究を成し遂げた寺石正路、考古学史研究は彼らの生きた時代を考古学史という形で描くこともできるのです。また、残された資料群を通して先人の学問のあり方や人格に触れることも可能です。そして、未だ私たちが気がつかなかった考古学の一側面をみることもできるのです。

考古学史の資料は、性質上散逸の運命をたどるものがほとんどです。膨大な考古学史の資料を個人で収集し散逸を防ぐことは極めて困難です。

日本の考古学も戦後考古学の一時代が終焉を迎えようとしています。地域の歴史系博物館では、散逸を防ぐために考古学史関係の資料収集を行っている館があります。これは、博物館として当然の努めでもあります。

日本考古学界の最重鎮斎藤忠博士（明治四一年生・現在でも活躍中）が、昭和三七年（一九六二）刊行の『日本の発掘』において「わが国の考古学が日進月歩の進展を見せようとしているとき、既往に顕現された遺跡・遺物自体のみが対象とされその功績も、知性も、辛苦の数々も、とかく忘却され勝ちである。・・・考古学上の発掘や発見の事実は、・・・・考古学史の本道を行く重要な一こま一こまである。」と述べていることを思い出します。地域の考古学史も一つの大切な歴史資料なのです。

（岡本）

れきみんトピックス

アマゾン開拓の父
﨑山比佐衛関係資料が寄贈されました！

戦前、遙かなる新天地を求め、ブラジルに移住した日本人は十数万人にのぼります。

その移民事業の推進に生涯のほとんどを捧げたのが、本山町出身のキリスト教徒、﨑山比佐衛（一八七五～一九四一）です。

比佐衛は、明治二六年（一八九三）一九才の時に武市安哉の北海道浦臼開拓に参加し、キリスト教主義による理想農村の建設に関わりました。

その後、青山学院在学中に、苦学生支援のための「学生労働会」を組織し、卒業後には、未曾有の就職難の解決手段として、海外移住の事業化を志したのでした。

今回寄贈された六〇件あまりの関係資料は、もともと「﨑山比佐衛伝」を著した比佐衛の同志、吉村繁義（本山町出身）のご子孫宅に遺されていたものが中心です。

開拓・植民に関する同氏の蔵書の他、比佐衛と共に創立・運営した「海外植民学校」関係の文書（規則・役員名簿・報告書）、政財界の支援者であった、板垣退助・大隈重信・渋沢栄一らとともに撮影された写真など、いずれも貴重なものばかりです。

比佐衛の一次資料としては、彼が二回目の南米旅行（一九二七～一九三〇）の際に携行した「聖書」（﨑山盛繁氏旧蔵）があります。余白にはビッシリと旅先での記録が記されており、最後の頁には「マウエスに於いて読み終わる」とあります。

彼は数年後、自らこのブラジルマウエス（現アマゾナス州）に一家を率いて移住。青年の頃からの理想に生きようとし、志半ばで没したのでした。

来年は、ブラジル移民が開始されてちょうど一〇〇年。比佐衛の生き方に光が当たることを祈ります。（野本）

「移民研究に必ず役立つと思います」と語る比佐衛のご子孫、﨑山ひろみさん
※今回の寄贈資料は、ひろみ氏が吉村邸や関係機関をまわって収集したものです。

歴民のパティオ(3)

館長　宅間　一之

古城址の懐深く焚く夏炉

とし子

岡豊山には、四万十川上流の津野町（旧東津野村）北川から移築した山村民家がある。茅葺きで、煤けた梁や柱は長い年月を語って味がある。登録有形文化財の旧味元家住宅主屋である。

去る六月、この民家で俳句を愛する人たちが集う勾玉社の「勾玉吟行会」が開かれた。茶の間の自在鉤がさがったいろりに火もいれ、家族が囲んだ食事の風情も演出して歓迎した。

火伏鯛自在鉤とし夏炉かな　一深
絶えず飛ぶ夏炉の尉を拭く媼　一深
説明の言葉少なに夏炉守　隆造

この日は岡豊城跡めぐりの日でもあった。古城に俳人の感覚をと数人の句会参加者の姿もあった。六月の古城の木々は、新緑から濃緑に色を移し、木漏れ日は柔らかく樹下にまだら模様を描いていた。

昨夜の雨洗いしみどり濃き城跡　梅子
極まれば緑も黒に大夏木　鹿水

巧妙な中世の城構え、その一つ一つに兵の姿を浮かべ、命を賭した攻防戦に思いを馳せ案内人も熱がこもる。

草茂る掘割端に井戸の跡　道子
堀切の深みにありし草いきれ　美枝子
木下闇虎口といふは道狭し　紅柳
狭めらる視界の茂り虎口きて　喜代子

「勾玉社」主宰橋田憲明氏より『勾玉』六四五号をいただいた。憲明選の六月勾玉吟行会の五八句の中からいただいた数句である。

民家の茶の間（登録有形文化財）

考古　地域考古学史の資料

寺石正路は、土佐の郷土史家として有名ですが、考古学の分野でも活躍した人物です。彼は、考古資料のスケッチや拓本を多く残しています。考古資料の絵は細部まで描かれ、小さいころに指導を受けたことを物語っています。ここに一冊のスケッチノートがあります。九州の考古資料のスケッチがあることから、九州に旅行した以後の明治二二年以降用いられたスケッチノートのようです。

明治・大正の時代の研究者や収集家は、如何にして資料勉学を進めていったのでしょうか。まず資料を実見することを第一としたようです。そして各地域の研究者と交流もしました。明治時代にも写真機はありますが、現在のように自由な資料撮影はできなかったのです。参考となる写真が掲載された専門書も非常に少なかったのです。研究者は、自分の足で資料を探索、実物をみて勉強をしていったのです。寺石資料の中には、これらのことを物語る地域考古学の資料として大変貴重なスケッチが残っています。明治時代にすでに盗掘されていた古墳出土の資料なども描かれています。土佐の考古資料の中には、すでに失われた資料や県外に流出したものもあります。寺石正路がスケッチして残した絵は、考古資料なのです。（岡本）

スケッチ

歴史　地券から見えること

明治六年（一八七三）、政府は、地租改正条例を布告して財政の安定を図りました。その際に、土地所有証書が発行されました。地券には、旧地券と新地券があり青色の地券は明治一〇年までに大蔵省紙幣寮が一億枚印刷して配布したもので、茶色の地券はその後大蔵省印刷局が印刷したものです。写真の地券は、土佐国香美郡山田野地村（現高知県香美市土佐山田町）の土地について明治一四年一二月二〇日に発行された地券です。「地券」の大きさは縦二五cm、横三五cmで、上段に大日本帝国政府と菊の紋章と桐の紋の図柄が大きく入り、一番下には、小さな文字で「大日本帝国政府大蔵省印刷局製造」の文字が横書きで書かれ、それに対して地券の文字は縦書きで、所在、面積、石高、地代金、持主名などが記載されています。当初は地価の三パーセントと決められていましたが、明治九年に地租改正反対一揆が各県で激しく起り明治一〇年に二・五パーセントに軽減されます。「明治九年改正」のたて判が地券の上に押され、「明治十年ヨリ」の文字が記入され、二・五パーセントの記入が三パーセントと並んで、地券に書かれています。さらに、裏書（府県庁が記入する）によって土地所有権移転の効力が発生しました。明治二二年（一八八九）、地券は全て廃止され土地台帳制度へ移行しました。（寺川）

地券（表）

民俗　発掘調査を文献調査

学芸員の机には本が積み上がっているというイメージがあります。実際のところ、企画展の調査でも現地調査に出掛ける前にも、まずは文献調査です。

今秋の土佐発掘物語展にちなんで考古学史と民俗学史の接点を調べるにも、文献調査ありきでした。

民俗学者桂井和雄が若い頃、土佐考古學會に入会、発掘にも参加していたことは本紙第三〇号でご紹介しました。桂井は、『土佐山民俗誌』に「著者はかってその上方の一小洞窟より弥生式土器の破片多数を発掘した」と記していました。この一小洞窟とは初平ケ岩屋洞穴遺跡ではないかと当たりをつけて文献を探していたら、宅間館長から安岡源一著『高知県土佐郡土佐山村字菖蒲「初平ケ岩屋」出土土器調査略報』を教わりました。これによると遺物が発見されたのは昭和一五年頃。その頃桂井は、土佐山村の小学校に勤務する傍ら民俗学の道を歩み始めていました。また、桂井が初平ケ岩屋洞穴遺跡で発掘した遺物を左の写真の青山文庫に寄贈したと同書にあります。

という訳で、桂井の発掘がより詳しく記された文献をご紹介しました。文献調査のその後は…、机に嚙りついてないで何度も何度も現地調査に行こう！（自戒を込めて）です。（中村）

昭和16年6月17日
於<佐川町青山文庫
城台発掘調査記念
桂井和雄：上段右から3人目

岡豊山フォトコンテスト

「岡豊山の桜・四季」をテーマとした写真展

昨年度より始めた新しい企画です。

岡豊山歴史公園の色々な表情を、皆様に知っていただきたいとはじめました。春の桜は県下でも有名な名所として、多くのお客様が花見に訪れられますが、実は四季を通じて様々な装いを見せてくれる公園なのです。

桜の春、新緑の初夏、色々な草花が咲く夏等、写真のテーマには事欠かない自然がこの小さな山（岡？）にはあります。年間通じてカメラを片手に散策に訪れる方や、家族連れでミニハイキングと展望所からの素晴らしい景色を楽しまれるお客様も多いのです。

平成19年度最優秀作品　「散花模様」
撮影・岡村雄策 氏

今回の写真展は、昨年の「桜」に絞ったテーマを広げ、四季をテーマにした関係で戸惑われた方が多くて、応募点数は昨年を下回りましたが、どの作品も力作揃いで審査員長の自然写真家前田博史氏も「優劣つけがたいです」と感想をおっしゃっていました。

表彰式後記念写真

入賞作品の表彰式は八月一九日(日)に行い、応募作品は全点当館ミニギャラリーにて作品展示会を九月末まで開催いたしました。尚、入賞作品の内で最優秀賞及び優秀賞の作品は、当館の特製木製額にA1サイズに引き伸ばして、館内に一年間展示しています。ぜひご覧下さい。来年度も春に開催しますので、応募をお待ちしております。

（猪野）

特別展　3館合同企画

坂本龍馬・中岡慎太郎展を終了して

暗殺一四〇年！時代が求めた〝命〟か？

特別展三館合同企画暗殺一四〇年！―時代が求めた〝命〟か？―「坂本龍馬・中岡慎太郎展」（七月二八日開幕）が八月二八日に無事閉幕しました。

この特別企画は、重要文化財を含む龍馬関係の資料を収蔵されている諸機関から借用させていただいた貴重な資料と三館が収集してきた資料、そして蓄積された研究成果等を持ち寄って開催した初めての合同企画展です。展示では、龍馬と慎太郎を正面から取り上げ、二人の活躍を物語る資料を数多く展示いたしました。展示資料は、三階常設展示室の一部と一階の企画展示室、そして二階には近江屋を復元しました。

また、関連事業として開催した三館周遊バスツアー、展示室トーク、特別講演会も龍馬・慎太郎の活動内容及び時代背景を知る手掛かりになったと好評でした。県外からバスツアーに参加された方もいらっしゃいました。

来館者をはじめとして、研究機関や関係諸機関からも反響を呼びました。ご協力頂きました皆様と諸機関の方に心よりお礼申し上げます。（高知県立歴史民俗資料館・高知県立坂本龍馬記念館・北川村立中岡慎太郎館）

復元された近江屋を見学する来館者

1階　展示室トーク風景

・・・新刊等のご案内・・・

「特別展３館合同企画 暗殺140年!
—時代が求めた“命”か?—
坂本龍馬・中岡慎太郎展」

平成19年度夏に特別企画された３館（高知県立歴史民俗資料館・高知県立坂本龍馬記念館・北川村立中岡慎太郎館）合同企画の図録。
A4版　102頁
売価　1,000円
送料　290円

「収蔵資料目録第12集
田辺寿男写真資料目録I
（白黒ネガフィルム編）」

民俗写真家・田辺寿男氏から寄贈された約50,000点の資料のうち白黒ネガフィルム26,578点を収録。

A4版 112頁
売価　750円　送料 290円

「高知県立歴史民俗資料館
研究紀要第15号」

土佐清水市四国霊場第38番札所金剛福寺
—木造千手観音菩薩立像修理報告
及び像内納入品概要報告—
高知県教育委員会文化財課
㈶美術院国宝修理所
泉谷　申一
高知県立歴史民俗資料館
寺石正路資料調査報告Ⅱ杜山堂日記2
野本　亮
門松小考
梅野　光興

A4版　76頁
売価　750円　　送料 290円

○郵便振替口座番号　01600−2−38806
○加入者名　高知県立歴史民俗資料館

岡豊風日（おこうふうじつ）第61号
平成一九年九月三〇日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783−0044　南国市岡豊町八幡１０９９−１
ＴＥＬ　０８８（８６２）２２１１
ＦＡＸ　０８８（８６２）２１１０
開館時間　午前９時～午後５時
休館日　年末年始（12月27日～1月1日）、臨時休館あり
観覧料　通常期（常設展）大人（18才以上）450円・団体（20人以上）360円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（一名）
印刷　共和印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成19年度10月～12月の催し

『土佐発掘物語ー土佐の発掘史ー』

平成19年10月６日(土)～11月25日(日)

土佐の発掘史を紐解きながら若くしてこの世を去った松浦佐用彦や土佐近代考古学の先駆者となった寺石正路、武市佐市郎らの活躍や発見された遺跡や遺物について紹介する。

土佐ではいつ頃から古墳・寺跡などの遺跡、土器や瓦などの遺物に関心が持たれていたのか。江戸時代から現代のような本格的な行政発掘が始まる昭和54年(1979)ころまでの発掘史を資料や写真、出土遺物でたどる第1回の土佐考古学史の企画展である。

企画展講演会　10月13日(土)　14:00～16:00
「あのころの私発掘史」
宅間一之(当館館長)
要予約　はがきかeメールで。入館券が必要です。

講座　11月10日(土)　14:00～15:30
「土佐の考古学史」　岡本桂典(当館学芸課長)

展示室トーク　10月21日(日)　14:00～15:00
担当学芸員による展示解説です。

れきみん講座　11月24日(土)　14:00～15:30
「仏教文化講座③ーインドの仏跡を訪ねてー」
岡本桂典(当館学芸課長)

ワクワクワーク

障子貼り　10月20日(土)　10:00～12:00
登録有形文化財の民家の障子貼りをします。

歴民探検　11月3日(祝・土)　10:00～12:00
博物館の裏側を探検します。

岡豊山の史跡探訪　11月3日(祝・土)　13:30～15:30
岡豊城跡を実際に歩きます。

紙でかぶとを作ろう　11月3日(祝・土)　13:00～15:00
自作のかぶとをかぶり、本陣前で戦国武将になってみよう。

羽釜でご飯を炊こう　11月23日(祝・金)　10:00～12:00
※電話等でお申し込みください。先着30名。

史跡めぐり

●10月27日(土)　（申込締切　10月12日）
上黒岩岩陰遺跡と一遍上人絵伝の岩屋寺を歩く

●11月17日(土)　（申込締切　10月27日）
愛媛県歴史文化博物館の「戦国南予の風雲録」展見学ツアー

申し込みの方法
●専用の申込書を館へご請求ください。
●参加費が必要です。(募集要項などでお知らせします。)
●申し込み多数の場合は抽選になります。

テーマ展
中世、木の道具ー南国市田村遺跡群出土木製品ー
平成19年10月20日(土)～11月25日(日)
南国市田村遺跡群から出土した木の道具たちを常設展示の１ケースへ展示します。

次回企画展予告
「なつかしのおもちゃ」
平成20年１月２日(水)～３月９日(日)
ブリキのおもちゃ・塗り絵などが登場。なつかしいあの頃のおもちゃ。